

レファレンス

コーナー

東南アジアの日本人

石井美千子

外務省の海外在留邦人数調査統計（平成一九年速報版）によると、平成一八年一〇月現在、東南アジアには約一〇万五五〇〇人の日本人が在住している。主流を占めているのは企業人であり、東南アジアの日本人といえは熱さのなかで奮闘するビジネスマンの姿が思い浮かぶ。しかし、東南アジア諸国には、明治初期から様々な日本人が在留していた。ここでは東南アジアの日本人の様々な姿を描く著作を紹介したい。

まず、歴史をたどる文献をあけてみよう。矢野暢著『南洋』の系譜（中公新書 一九七五年）は、明治初期の「からゆきさん」や行商人から戦後の企業人まで、時代を追って東南アジアに渡った日本人の変遷を考察している。原不二夫著『英領マラヤの日本人』（アジア経済研究所 一九八六年）と、同『忘れられた南洋移民—マラヤ渡航日本人農民の軌跡』（アジア経済研究所 一九八七年）は、それまで見落とされていた農業移民の存在を日本の英領マラヤ移民史の中に明確に位置つけた研究論文である。西岡喬織著『シンガポールの日本人社会史—「日

本人学校」の軌跡』（芙蓉書房出版 一九九七年）は、明治時代からマレーシアとシンガポールの独立に至るまでの日本人社会の歴史を描く。戦中戦後、各日本人収容所に学校を作ってきた日本人社会のたくましさの象徴として「日本人学校」が副題に掲げられている。これに合わせて、写真と主体とするドキュメント『戦前シンガポールの日本人社会—写真と記録』（シンガポール日本人会 一九九八年）をめぐって見れば、往時の日本人社会の様子が鮮明に伝わってくる。日本サラワク協会編『サラワクと日本人—マレーシア・サラワク州と日本人の交流史』（せらび書房 一九九八年）は移民者の証言によってサラワクの在留邦人の歴史をたどるものである。同様の図書でインドネシアに関するものに『ジャガタラ閑話—蘭印時代邦人の足跡』（ジャガタラ友の会 一九八八年）、『写真で綴る蘭印生活半世紀—戦前期インドネシアの日本人社会』（ジャガタラ友の会 一九八七年）がある。

次に個々の日本人を描くノンフィクション作品を紹介したい。松本逸也著『シャムの日本人写真師—めこん 一九九二年』は、タイ国立公文書館所蔵の古い写真を発見したのが発端となつて、明治時代にタイで写真館を営んでいた二人の日本人写真師（磯長と田中盛之介）の足跡を追跡したもので、彼らの遺

族と、田中の写真館の後継者であり、バンコク永住者の長老である長谷部秀氏の証言を得て書かれている。

戦中、戦後期の東南アジア在住日本人を描く著作には胸を打つものが多い。瀬戸正夫著『父と日本にすたられて—瀬戸正夫の人生を通して東南アジアの歴史』（かのう書房 一九九五年）は、日本人の父とタイ人の母との間に生まれ、波乱に満ちた人生を歩んだ著者の自伝である。副題のとおり、ここには著者の目から見た戦中、戦後の在タイ日本人の姿が客観的な情勢の記述とともに克明に記されている。通っていた塾合日本国民学校の様子が詳しく描かれているのも貴重である。三留理男著『望郷—皇軍兵いまだ帰還せず』（東京書籍 一九八八年）は、戦後も帰国せずにタイに永住した元日本兵、フィリピンの残留孤児、インドネシア独立軍に加わりそのまま永住した元日本兵、及び日本兵として戦地に赴いた台湾人元兵士の戦中戦後の足跡を取材したもの。永住残留兵は現地で家庭を築き、現地に埋もれるかのようにひっそり生きている人が多い。写真家である著者によって写された顔には苦労が深く刻まれている。

フィリピンでは戦後、捕虜となつて強制送還や死刑にされた日本兵の血をひく日系孤児が、日本軍への反感にもとづく迫害に耐えてきた半生を語っている。鴨野守著『バギオの虹—シスター海野とフィリピン日系人の一〇〇年』（アートヴィレッジ

二〇〇三年）は、フィリピンの日系孤児たちの半生と、彼らを物心両面で支えたシスター海野の活動を記している。シスター海野は日本兵捕虜の遺骨を掘り起こし、荼毘にふす活動にも献身的に取り組んだという。矢野成典著『三井物産ジャカルタ支店』（講談社 一九八二年）は、昭和一八年に三井物産の南方派遣員に志願してジャカルタに赴任し、現地で終戦を迎えた著者の回想録である。企業もまた軍政に奉仕した時代の駐在者の体験がつぶさに記されている。羽田令子著『女スパイ、戦時下のタイへ』（社会評論社 二〇〇三年）は、昭和一九年にバンコクに赴任する商社マンの夫とともにタイに渡る際に軍部の命を受けて諜報活動にあたった女性の話である。巷に潜入して抗日運動の動きを探った日々に見聞した事柄を、戦後もタイに永住する本人に取材している。

東南アジアの日本人は駐在者と永住者に分けられる。ここにあげた著作からも窺えるように永住者には実に様々な背景を背負っている人々が多い。その存在に焦点をあてた著作に赤木攻著『タイの永住日本人』（めこん 一九九二年）がある。著者は永住者を対象におこなった調査から永住の理由、駐在者との違い、永住者の意識等を明らかにし、永住者を現地社会との草の根交流に寄与できる存在として期待を寄せている。

（いしい みちこ／アジア経済研究所図書館）